

日本石油会社の出油と上越鉱業界 (新潟縣通信)

薬学雑誌 1901 年度 3 月号(明治 34 年)296 頁

先日渋谷の温泉施設で天然ガスが爆発した事件で、南関東ガス田の話がテレビに出た。日本は資源がないと教わってきたのに、東シナ海紛争ガス田より大きな埋蔵量と聞いて驚いた人も多かろう。地盤沈下や経済性の問題で簡単に資源とはならないのだろうが、昔は今では想像できないような天然資源があった。越後の手掘り石油のことである。

古くは天智天皇の御宇、燃える水が献上されている。臭かったので草生水(くそうみづ)と呼ばれ、湧いている草生水谷、草生水川は越後各地にあった。悪臭と農作物への害だけでなく、いったん火がつけば田畑を燃え尽くすこともあり長いこと厄介ものであったが、江戸時代には近くの農民たちが焚き木の代わりに使うようになる(灯火としては悪臭ゆえ菜種油

の半値)。

明治 34 年は、英国で建造中の最新鋭艦三笠でさえ燃料が石炭であるなど、まだまだ石油は生産、利用とも発展途上であった。しかし実業界の期待は相当なものである。

「上越の山野至るところ鉱区地ならざるは無し。採油地より製油所に送油鉄管の埋設は雪を冒して工事を急げり。車に轎にまた人肩によりて運ばるる原油は幾百石幾千石なるを知らず」運送行列の桶から滴一滴漏れる油は雪解け水と一緒に道路一面に漲った。「日本石油、長岡興業等は競うて鉱区買占め、スタンダード石油は北越鉄路株を一手にし運輸の便を掌握せんと企て、壮大なる建物を増築せられつつあり。一方では送油管を東京市根岸近傍まで埋めんと計れり…山師的投機者の時期は過ぎ慎重なる鉱業家の時期となれり。北越の石油界また多望なるかな」

ふと、かつては石油の分析、精製なども薬学の守備範囲であったことに気がつく。いまや急激な定員増で工学部に次ぐ巨大学部となりつつあるが、多様性はむしろ減っているように見えるのは気のせいかな。

小林 力